〈教育相談〉

学校で口をきかない子供（場面緘黙児）の援助指導

―― 事例研究を試みて ――

教育相談部　佐　藤　弘　幸

1．はじめに

「家ではよくしゃべり，近所の子供たちとも元気に遊ぶのに，学校に行くとさっぱりしゃべらなくなる。いったい，どうしてなのでしょう。」と当相談室を訪れるケースが時々みられる。

家では，普通の子供と何らかわらないために，親や教師は，「なぜ話さないの」「だまっていないではっきり話してよ」等と，なんとかして口をきかせようと努力をする。しかし，話しかければかける程何の反応も示さなくなるし，かえって，表情に緊張感がみられ，貝が口を閉ざしたように黙ってしまうのである。

このような子供を緘黙児（かんもくじ）といい，特に，学校といった特定の場所（場面）にいくと，緊張状態に陥りだんまり病になってしまうものを場面緘黙と呼び，心の病が原因になっている。

本稿では，事例研究での試みを中心に，場面緘黙児の行動特性や援助指導について述べてみたい。

2．口をきかない子供の行動特性

学校で口をきかない子供といっても，教師とは少しは話をするが，級友とはまったく話さない。逆に数人の級友とは「はい」「いいえ」程度の口をきくが，教師とはまったく話さない等，様々である。しかし，緘黙児には，共通した行動特性がみられる。

(1) 口もきかず行動も抑制的で，視線があうとすぐそらし，他人をさけようとする。

(2) 集団にうちとけず，表情や態度にかたさがみられ，動作がぎこちない。

(3) 休み時間はうろうろしているだけで，友人との遊びに参加できない。

(4) 授業中はじっと座っているだけで，ノートすることもしないで，好き勝手な勉強をし，体育の学習には参加できない。

(5) 心理的な圧迫を感じると，緊張が強く，体が硬直し発汗することもある。

以上のような行動特性がみられるのは，しゃべらないことによって，心理的な安定をはかっているからだと考えられる。指導にあたっては，子供の行動特性や原因を明らかにしながら，取り組むことが大事であろう。

3．場面緘黙児への取り組みの事例

(1) 事例の概要

小学校３年女子，Ｈ子

この事例は，小学校１年に入学して以来，教師や友人とまったく口をきかず，授業中に指名されても，自分の考えをはっきり答えることができない。もちろん，「はい」の返事もできず，集団生活にうちとけない。

(2) 症状形成の背景

本人が口をきかなくなった背景には，次のような理由が大きく影響していると思われる。

① 乳児期にベビーホームにあずけられ，愛情に満ちた両親との接触がなく，生き生きと育っていない。

② 放任的な養育態度のため，自我がゆがめられ引っ込み思案なところが多く，耐性の弱い子供として育っている。

③ 両親が共稼ぎのため，家で過ごすことが多く社会的経験不足のままに成長している。

④ 友人が少なく集団参加への技術が未熟で，集団への適応に苦労している。

⑤ １年生の時，会話したことを友人に笑われた心の痛手が作用し，しゃべらないことで自分自身を防衛している。

以上のことから，Ｈ子が緘黙状態を引き起こしている原因としては，親の養育態度のまずさが，自我を未熟なものにし，その影響として，集団場面で不安や緊張を感じやすいパーソナリティが形成されたと考えられる。すなわち自我の未熟さ，傷つきやすさが，絶えず防衛反応を必要とし，その手段として緘黙状態へと発展していると思われる。

(3) Ｈ子への援助指導

① 基本的態度